

実に初心の如くせんに、誰か道人と為らざらん

定光寺 乙川文英

平成二十九年三月三十一日 加茂法話会

『伝光録』第十六祖羅喉羅多尊者章より

「汝が家に昔曾一比丘を供養す。彼比丘、然も道眼未だ明ならず。虚く信施に露ふを以ての故に、報ゆるに木菌と為れり。」

「比丘として家を捨て道に入りぬ。居処も是れ吾地に非ず。食法、全く是れ我物に非ず。衣服も全く我業に非ず。一滴草一茎草、総て是れ受用すべき物に非ず。所以如何となれば、汝諸人悉く皆国土に孕まる。一天下国土上、悉く是国王の水土に非ずといふことなし。然るに家に在れば親に仕へ、国に侍れば君に事ふまつる。是の如くなる時、天地加護ありて、自ら陰陽の恵を受く。然もなまじぬに仏法を願はんと号して、仕ふべき親にも仕へず、事ふまつるべき君にも事ふまつらず。何を以てか父母生成の恩を報じ、何を以てか国王水土の恩を報ぜんや。道に入りて道眼なからん、恰も国賊と謂つべし。」

「昔の比丘は道眼未だ明ならずと雖も、修行退転なきに依て、是を報ずる故に木菌とも作れり。今の比丘の如きは、一生已に終らん時、閻老、汝を許すこと能はず。今の粥飯は或は鉄湯となり、或は鉄丸となりて、是を呑ん時、身心紅爛しもて行くことあらん」

「諸上座、光陰惜むべし。時は人を待たず。一朝眼光落地を待つこと莫れ。緇田一箕の功なくんば、鉄圍百刑の痛に陥る。言ふこと莫れ、道はずと。諸仁者、幸に辱く如来の正法輪に遭へり。市中に虎に遭はんよりも稀なり。優曇華の一現するよりも稀れなるべし。子細に用心し、子細に参学して、須く道眼清明なるべし。」

「思ふべし、汝等家を捨て郷を離れし時、一粒の蓄へなく一糸をも懸けず、孤露にして遊行す。只道眼の為に身を任せ、法の為に命を捨つべし。豈最初発心、徒に名利の爲め衣食の爲めにせんや。然れば人人問ふに及ばず、但自己最初の発心を顧みて、自らは処を省み、又不是処を省みよ。故に謂ふ。終を慎むこと始の如くすること難しと。実に初心の如くせんに、誰か道人と為らざらん。」